

ひめゆり平和祈念資料館

# 資料館だより



第 62 号  
2018.11.30

## 目 次

●資料館トピックス	1
ワークショップ「メモリーウォーク」開催／2018年度ひめゆりの塔慰霊祭 举行／琉球大学講義「キャリア形成入門」に職員を派遣／「第14回ハンセン病市民学会総会・交流集会in沖縄」に職員を派遣／ウチナージュニアスタディツアー事業「平和学習」を実施／館外「平和講話」を実施／島尻地区および糸満市教員研修への協力、教員向け講習会の開催／「夏休み親子フィールドワーク～ひめゆり学徒隊の沖縄戦」開催／「第17回平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会」開催／「沖縄県地域通訳案内士スキルアップ研修」の学習会実施／糸満市平和ガイド育成事業に協力／沖縄県平和祈念資料館特別展関連講座に職員を派遣	
●ひめゆり平和祈念資料館は30周年を迎えます	7
●相思樹	7
●ひめゆり研究ノート⑧	
ひめゆり学徒隊引率教師たちとその時代(4)	8
●仲宗根政善日記抄(58)	11
●本棚(仲程昌徳)	13
●声	14
●資料館ガイド	15

# 資料館トピックス

## ◆ワークショップ「メモリーウォーク」開催

2018年8月8日から11日の4日間、「メモリーウォーク」を開催しました。「メモリーウォーク」とは、オランダにあるアンネ・フランク・ハウスが行っている映像ワークショップのことであり、講師のヤン・ポール・ダブルマンさんの協力のもと、今回、日本で初めての開催が実現しました。県内、県外、海外から14人の若者が参加し、4日間の日程で、沖縄戦のモニュメントを巡り、撮影・インタビューを通して、モニュメントの歴史や現状についての短い映像作品を作り、発表しました。

1日目は、資料館周辺のモニュメントを巡るツアーを実施。ツアーは、「ひめゆりの塔」から始まり、米須にある「忠霊之塔」、「ひめゆり学徒散華の跡碑」(荒崎海岸)、「黎明之塔」、「全学徒隊の碑」、「平和の礎」を巡り、資料館職員などがモニュメントの説明を行いました。ダブルマンさんのアドバイスを受けて、初めから全てを説明するのではなく、できるだけ参加者との対話を心がけるようにしました。参加者にとっても新しいアプローチだったようで、「自分の意見が言えて良かった」との感想がありました。

2日目、3日目は、撮影、インタビュー、映像編集という日程で、初めての映像制作に戸惑いつつも、参加者は、自分たちの考えを表現するためにチームで話し合いを重ねながら、一生懸命作品づくりに取り組んでいました。4日目には完成した2作品「ひめゆり学徒散華の跡碑」と「忠霊之塔」の発表会が開かれました。質疑応答の場面では、参加者は、ただ作品を説明するだけでなく、このワークショップを通して学んだ歴史や各モニュメントの現状、そして平和への思いを語っていました。沖縄戦の記憶を伝え継ぐ難しさを実感しつつも、映像などの新たな手法を使って、自分の手で歴史を伝えていきたいという気持ちを抱いたようでした。

また、今回は、外部の方々とのコラボレーションも行われました。ダブルマンさんをはじめ、沖縄出身の映画監督である宮平貴子さんが映像制作の指導を、糸満市字米須出身の久保田暁さんが「忠霊之塔」のガイドを引き受けてくださいました。

資料館にとって、メモリーウォークの実施は、沖縄戦を伝える新たな取り組みとして貴重な経験となりました。参加者が作成した映像作品は、資料館公式YouTubeにて公開しています。

- ① 「ひめゆり学徒散華の跡碑」：[https://youtu.be/Bke7xAti\\_FQ](https://youtu.be/Bke7xAti_FQ)
- ② 「忠霊之塔」：<https://youtu.be/M6MwcDI73Tw>



忠霊之塔で久保田さんのガイドに聞き入る



作品について話し合う講師と参加者



中庭にて仲里正子証言員へのインタビュー



ワークショップ終了後の集合写真

## ◆ 2018年度ひめゆりの塔慰霊祭 挙行

6月23日、2018年度ひめゆりの塔慰霊祭が挙行政、約350人の遺族、ひめゆり同窓生、関係者が参列しました。慰霊祭前には糸満高校合唱部による「レクイエム・コンサート」が行われ、「別れの曲」などひめゆりにゆかりのある歌が伸びやかに歌われ、参列者の涙を誘いました。

ご遺族の高齢化が進み、亡くなった学徒を直接知らない世代の参列者も目立ちます。慰霊祭は、沖縄戦で失った家族に思いを馳せ、平和を感じる場になっているようです。



焼香し手を合わせのご遺族



糸満高校合唱部の歌声が響いた

## ◆ 琉球大学講義「キャリア形成入門」に職員を派遣

5月2日、琉球大学の講義「キャリア形成入門」に、説明員の仲田晃子をゲストスピーカーとして派遣しました。仲田は、映像や写真を使い、沖縄戦の体験者自身が中心となって運営、活動してきた当館の特徴、戦後世代の説明員の仕事と課題、さらに資料館の仕事に就くまでの大学時代の学びについて話しました。担当した2コマで約140人が受講し、学生からは、資料館にぜひ行きたい、これまでの平和学習では聞いたことがない話を聞いた、と感想が寄せられました。

## ◆ 「第14回ハンセン病市民学会総会・交流集会 in 沖縄」に職員を派遣

5月19～21日、沖縄愛楽園で開催された「第14回ハンセン病市民学会総会・交流会 in 沖縄」に、

当館から学芸課長の古賀徳子が出席し、分科会で「ひめゆりの次世代継承の現在—資料館で継承する」と題して報告しました。

分科会のテーマは、「体験者から非体験者への継承を考える—沖縄戦継承の現場から」で、ハンセン病回復者の高齢化や減少により体験者が直接体験を語り継ぐことが難しくなっていく中で、沖縄戦体験の継承の多様な取り組みからヒントを見出したいと行われました。

地域の戦争体験者と学校現場をつなぎ、平和学習担当の先生が子どもたちの目の前で体験者から聞き取りを行えるようにサポートしている名護市史や、アーティストとのコラボレーションによって沖縄戦の証言や遺品を再発見する展示会を行った南風原文化センターなど、さまざまなアプローチによる継承の取り組みが話し合われました。

## ◆ウチナージュニアスタディツアー事業「平和学習」を実施

8月1日、沖縄県主催ウチナージュニアスタディツアー事業の一環として、北米や中南米の沖縄県系人の子弟など33人(海外16、県内16、県外1)が当館を訪れました。資料館では、展示見学とアニメ「ひめゆり」視聴後、ワークショップで、お互いの意見に耳を傾け、平和をつくるために何をすべきか話し合いました。参加者からは、「(鳥袋淑子さんの)命が一番大切だという言葉が心に残った。戦争や暴力は無意味だと感じた」、「自分と違う意見を聞いて理解を深めることができた」となどの声がありました。



参加者のワークショップの様子

## ◆館外「平和講話」を実施

6月から8月にかけて、普天間朝佳館長が、琉球大学附属中学校(6月15日、430人)にて、尾鍋拓美説明員が、三重大学(7月2日、約40人)、北海道・廣隆寺(7月15日、約120人)、新潟県・中越高等学校(8月31日、2年生351人)にて、計4回の館外「平和講話」を実施しました。

講話を聞いた高校生の感想の中には「体験のない人が伝える姿を見て、自分もできることからしていこうと思った」という感想が寄せられました。

館外での講話は、来館したことがない、あるいは沖縄に来たことがない方にも広くひめゆり学徒隊の沖縄戦を知っていただく機会となりました。また、戦争体験のない職員が行うことで、当館の次世代継承の取り組みを伝えることにもつながっています。

さらに、館外で講話を行う際は、実施する地域や話す対象によって、写真等の情報を付加したり、内容を再構成したり、伝えるための新たな工夫が必要になります。実施によってさまざまな課題も見えてきます。それらの経験を、館内での講話や展示室説明にも活かしながら、より伝わる内容を目指し、工夫を続けていきたいと考えています。

## ◆島尻地区および糸満市教員研修への協力、教員向け講習会の開催

7月26日、「島尻地区中堅教諭等資質向上研修」の教職員34人を対象に、アニメ「ひめゆり」上映、展示ガイドツアーを実施しました。

8月3日には、「ひめゆり平和祈念資料館 教員向け講習会」を開催し、23人が参加しました。今年は糸満市教育委員会の初任者研修を兼ねており、また高嶺中学校から校内研修としての参加もあり、糸満市内の先生方が大半となりました。

今回は「児童・生徒を引率する際に、展示や講話を通して、何を学ぶことができるかを参加者自身で考える」ことを目的に、「展示室での小中学生の疑問や反応」を説明員の仲田晃子が報告し、その後「展示をどう使うか」というグループワークを行いました。参加者からは、「フォトランゲージを行った後に展示室を見学したのはとても良かった。知らない間に、自分にアンテナが立っていて興味、関心を持って見ることができた。」「聞いたことは忘れても、考えたり発見したことは身になるということに可能性を感じる」などの感想が寄せられました。



島尻地区中堅教諭等資質向上研修でのガイドツアー



グループワークのまとめを発表する参加者

## ◆「夏休み親子フィールドワーク～ひめゆり学徒隊の沖縄戦」開催

7月28日と8月17日に、夏休み企画として、「親子フィールドワーク～ひめゆり学徒隊の沖縄戦」を開催しました。資料館から徒歩で、ひめゆりの塔、伊原第一外科壕へ行き、ガマの様子を観察したり、ガマで実際におきた事を伝えるもので、約90分の内容です。低学年の子どもも対象にしたフィールドワークは、初めての開催となりました。



実際のガマ（洞窟）で説明を聞く（7月28日）



実物資料を興味深く観察する参加者（8月17日）

7月28日は、県内外から10人が参加しました。子どもたちは、ガマ入口の虫の多さや、濡れた土に、壕内で過ごすことの大変さを感じ、砲弾の破片に実際に触れて、その重さに驚いていました。

8月17日は、県内から10人が参加しました。前日の豪雨の影響で予定を変更し、ひめゆりの塔と資料館の展示を使い、伊原第三外科壕で起きた事を伝える内容となりました。同壕にいた宮良ルリさんの証言映像の視聴のほか、バックヤードで、壕内から収集された実物資料の観察も行いました。親ごさんたちは、初めて知る話に驚いたり、気軽に質問をしながら理解を深めている様子でした。子どもたちも、感想や質問を話しながらのびのびと見学しました。

## ◆「第17回平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会」開催

9月8日・9日の両日で、「第17回平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会」が当館で開催されました。「平和のための博物館・市民ネットワーク」は、全国の平和博物館関係者や平和研究者などが加盟する組織です。年に1度の全国交流会は、加盟者が一堂に会し、情報や意見交換等の貴重な場となっています。沖縄での開催は初めてのことです。

初日はひめゆりピースホール（那覇市）で、2日目は当館多目的ホールで開催し、合計54人が参加しました。次世代への記憶継承や、平和博物館の在り方について、各企画展の紹介など、様々なテーマで、両日あわせて11の報告がありました。2日目は当館の説明員尾鍋拓美が「平和講話」を行いました。継承の形のひとつである「平和講話」を通して、活発な意見交流がなされました。午後は、山城本部壕や荒崎海岸などひめゆり学徒隊のゆかりの戦跡を巡るフィールドワークを行いました。沖縄での開催は、ひめゆり学徒隊や沖縄戦についてより深く伝える機会にもなりました。

2日間で様々な情報交換、意見交流を行うことができ、充実した交流会となりました。



ひめゆりピースホールでの報告の様子



ひめゆり学徒の最期の地の一つ、荒崎海岸を訪れる

## ◆「沖縄県地域通訳案内士スキルアップ研修」の学習会実施

9月15日、「沖縄県地域通訳案内士スキルアップ研修」の学習会を実施しました。今回、英語・韓国語の通訳案内士が対象となっており、映像「ひめゆりの証言員たち」視聴、3グループでの学芸員・説明員によるガイドツアー、質疑応答・意見交流を行いました。通訳案内士としての経験が豊富な方が多く、ガイドツアーの最中から、多くの質問がありました。また、逆に参加者から、外国からの観光客の興味関心についてアドバイスをいただきました。

意見交流では、ひめゆり学徒隊の死亡者数の記述がわかりにくいこと、展示室内の空調の管理、アニメ「ひ

めゆり」の定期上映について、映像への英字幕の付加、自動販売機の設置など、様々な意見や要望があり、当館にとっても非常に参考になりました。次回は、中国語の通訳案内士対象で、2019年1月に実施予定です。



ガイドツアーでも熱心に質問があった



多くの質問、意見が出た意見交流

## ◆糸満市平和ガイド育成事業に協力

10月21日、「糸満市平和ガイド育成事業」受講生ら15人が、当館で研修を行い、ひめゆりの塔やひめゆり学徒隊について学びました。同事業は、沖縄戦終焉の地・糸満市の小中学生が平和ガイドとして活動できるようになることを目標としています。

普天間朝佳館長の挨拶のあと、ビデオ「ひめゆりの証言員たち」視聴、学芸員によるガイドツアー、代表者のガイド実践などを行いました。参加者からは「映像の最後に体験者全員の笑顔が出てきて、つらいことから始まった活動が、最後に笑顔が見られて良かったと思った」「体験者が、話すことをつらいと思っていたことも語り継ぎたい」などの感想が聞かれました。



ひめゆりの塔前でガイド実践をする受講生

## ◆沖縄県平和祈念資料館特別展関連講座に職員を派遣

10月21日、沖縄県平和祈念資料館特別企画展「沖縄県民の戦争被害と次代への継承」の関連講座「沖縄戦の教訓をどのように伝え、平和の創造へ繋げていくのか」が開催され、当館学芸課長古賀徳子が出席しました。名桜大学の嘉納英明教授による基調講演「沖縄の子どもの戦後史」の後、南風原文化センター平良次子氏は、「南風原町子ども平和学習交流事業」について、県平和祈念資料館友の会安田國重氏からは友の会の活動の現状、読谷高校松田江利奈教諭は「6・23平和特設授業」について、古賀は当館の次世代継承の取り組みを報告しました。「沖縄戦の次世代継承」という課題や取り組みについて共有する重要な場となりました。

2019年6月23日

## ひめゆり平和祈念資料館は30周年を迎えます

ひめゆり平和祈念資料館は、1989年にひめゆり同窓会によって設立されました。以来、ひめゆり学徒隊生存者（証言員）が展示室で戦争体験を伝え、戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さを伝え続けてきました。企画展・特別展やイベントなどの活動にとどまらず、ひめゆり学徒隊生存者の高齢化を見据え、次世代継承にも力を入れてまいりました。

そして、来年6月23日。いよいよ30周年を迎えます。

開館以来の来館者は2200万人以上にのぼりました。30周年の節目を迎えることができるのも、ひとえに多くの皆様のご支援の賜と感謝しております。来年は、30周年記念のさまざまなイベントを企画しています。どうぞご期待下さい。

30周年を機に、次の新たなステージへ踏み出すひめゆり平和祈念資料館を、今後ともよろしくお願いたします。

### 相 思 樹

「モノUMENTが存在する意味」

ひめゆり平和研究所 狩俣英美

昨年、ひめゆり平和研究所の所員となり、8月には「メモリーウォーク」という研究所初の大きな事業に携わることができました。その中で、講師のダブルマン氏によるレクチャー「モノUMENTとは何か」は、とても印象に残る場面でした。

モノUMENTとは「記念碑」と訳され、過去の出来事を人々の記憶に留めておくための役割を担っています。過去の栄光を賛美する巨大な戦士の像や、戦争の残忍な性質を表現するために爆撃を受けた状態で保存された街など、多様なかたちでメッセージを表現しています。

また、一目でそのメッセージが伝わるモノUMENTがあれば、解説なしでは理解し難いものもあります。設立者がモノUMENTに込めた願いを理解するためには、受け手となる私たちが歴史的背景やモノUMENTを取り囲む現状をしっかりと捉えなければなりません。過去を写すモノUMENTと向き合い、今を生きる人々が関心を持ちながら議論を続けることが重要であるとダブルマン氏は語っていました。

仲宗根政善氏は、「塔前で心を込めて祈りをして下さる者がいるかと思うと、塔に尻をむけて自分らの写真をとって帰るだけのものもいる」とひめゆりの塔の現状をさびしく語る一文を残しています。せっかく現地に来て、モノUMENTに込められた思いを知らずに帰ってしまう人々がいる。そのような状況を少しでも変えるために、モノUMENTが存在する意味を問いかける意義があると強く感じました。



## ひめゆり研究ノート⑩

# ひめゆり学徒隊引率教師たちとその時代 (4)

### 4. 引率教師たちの戦後

1945年6月18日夜の解散命令後、生徒や教師たちは次々と壕を出て行った。壕の外には米軍による猛爆撃が待ち受けていた。多くの死傷者を出しながら、生徒や教師たちはその先の海岸へと追い詰められていく。南の果ての海岸まで追いつめられた教師の中には、生徒とともに手榴弾を爆発させ自決した者もいた。一方で、自決寸前に、母を慕う生徒の一言により自決を止めた教師もいた。しかし、引率教師の与那嶺松助が書いているように、自決は条件さえそろえば誰にでも起こり得ることだったのである。

「精も根もつき果てた私たちはもう皆で自決しようと話し合っていました。特に3年生は、『平良先生、今のうちに死にましよう』といらだっていました。先生は先生で11人の運命を託されているという責任感と悲壮感で、とてもいらいらしているようでした。翌日、突然私の所に血だらけの兵隊が転がり込んできました。『敵だ』という叫び声が起ると同時に、平良先生が反射的に9人のいる穴の方へ飛び込んでしまったんです。私と比嘉初枝さんが自決現場に駆け寄りましたら、一面血だらけで10人が倒れていたんです。平良先生は腸が全部出て、真ん中にうつ伏せになっていました。3年生が一番酷い様子で判別出来ないぐらいでした。」(ひめゆり学徒隊生存者・宮城喜久子)<sup>1</sup>

「『皆自決しよう、自決だ。自決だ』と言って、仲宗根先生の方にかたまって腕を組み、今にも自決しようという状態になったわけです。その時、私は、『先生、死にたくない。お母さんにもう一度会ってから死にたい』と、本当にもう泣かんばかりに言ったのです。したら先生は、『弾を捨てなさい!』と怒鳴ったんです。『弾を捨てろ!』と、つづけておっしゃったので、上級生も先生の命令に従って手榴弾を投げ捨てました。間もなくアメリカ兵のほうに行って捕虜になったんです。」(ひめゆり学徒隊生存者・山内祐子)<sup>2</sup>

「平良先生たちも、早まらなければ…と一瞬思った。しかし平良先生の日ごろの“皇国”に尽くそうという一途な思いこみと、手もとにあった五発の手榴弾、そ

れにたまたま先生たちの壕からは海岸線が一望のもとにのぞけ、米兵が駆けのぼるようすが手にとるようにわかるので、その恐怖心と絶望がひときわつのもつたろうという偶然、——これらを考えあわせると、その自決もしかたがないように思われる。」(元女師・一高教員・与那嶺松助)<sup>3</sup>

「その時内田先生が、『海に入りて自決せん』と書いた紙を回してきたんです。トミちゃんと2人で今はダメよねと話し合い、時期未だ至らずと、その紙に書いて先生に回したんです。そしたら内田先生が、『お前達は時期至らずと言うけどもね、人間は死ぬ機会を逃したらなかなか死ぬるもんじゃないんだぞ』っておっしゃったんです。私達は、『生きていたらいつでも死ぬる』と言ったんです。とにかく今は死ぬべきじゃないと言ったんです。」(ひめゆり学徒隊生存者・伊波園子)<sup>4</sup>

解散命令後の“死の彷徨<sup>ぼうこう</sup>”の後、引率教師18人のうち、西平英夫、仲宗根政善、大城知善、岸本幸安、与那嶺松助の5人の教師が生き残った。生き残った教師たちは、生き残ったことを素直に喜ぶことはできなかった。多くの教え子を戦場に動員し死なせてしまった彼らには、重たい戦後が待っていたのである。彼らの多くは戦後自らの戦争体験を語ることはなかった。

戦争が終わって間もない頃、生き残った教師の一人である仲宗根政善は、亡くなった学徒の親たちの、深い悲しみを目の当たりにしなければならなかった。

「(伊原第三外科壕の中にあつた遺骨が収集され白木の箱に入れられ仲宗根先生のもとへ届けられた。それを伝え聞いた遺族が次から次へと訪ねてきた。最初に来たのは宮城藤子の両親だった(引用者注) 私はこの両親のもとで、はじめて白木の箱をあけた。なかにもとどりのついたこげた黒髪がはいっていた。藤子の母は黒髪を両手でわしづかみにして全身をふるわせながら、もとどりの生地と模様をしらべていた。涙は手の甲に、もとどりに、黒髪に、白骨にポロポロと落ちた。泣きはらした目をこちらに向けて、

『先生これをいただいてよろしゅうございますか』

と黒髪を白紙につつんでおさめた。しかし母の靈感をもってしても、わが子の骨かどうか見わけるとは困難であった。さらに骨をあさり、頭をかしげては骨の一つ一つをえりわけた。そばにいた夫はたまりかねて妻の袖をひいてうつむいた。(中略) 引率の身にとっては、こうした親の悲しみを見るにつけ、腸のちぎれる思いがして、どうおわびのことばを申していいやらわからなかった。(元女師・一高女教員・仲宗根政善)<sup>5</sup>

一方、西平英夫は、本土に帰還後、急に不機嫌になってどなりちらすなど人が変わったようになり、家族を困惑させる。そして1954年、戦後9年後に亡くなった。

「父が収容所から食べ残して持って帰ったというチョコレートやクッキーを、私たちは歓声をあげて奪い合い、それを父は目を細めて見ていたが、最後に黄色いしみのついた小さな紙包みをいくつか取り出し大切に父はそれをわきに置いた。私がある一つを取り上げてあげようとする、急に父は血相をかえて『これはお前たちのものじゃない』とそれを奪い取った。そんな乱暴な父を私はその時はじめて見た。その紙包みは神棚に上げられ、それが父と行動をともにするうちに亡くなった沖縄の生徒たちの遺髪であったことを私はあとで母から聞いた。

その後、私たちは急に不機嫌になってどなりちらす父にたびたび驚かされた。(西平英夫の娘・松永英美)<sup>6</sup>

与那嶺松助は、社会がまだ混乱している終戦直後に、生き残った学徒とともに、亡くなった学徒の遺骨収集に行っている。

「(文教学校に入学後、学級担任の与那嶺先生から一引用者注)『兼城、遺骨収集に行こう』

荒崎海岸のあの断崖の上に、学友たちの遺骨を收拾に行こう、と言われるのです。あの場所には二度と行きたくないという気持ちの強かった私は、とても先生について行く気になりませんでした。しかし、『みんなが亡くなった場所は、私たちのほかには誰も知らないんだよ』と先生に言われ、私もやっと思行決心がついたのです。(中略)

亡き学友の遺骨收拾は、十七歳の私にとってあまりにつらく、重い体験でした。(ひめゆり学徒隊生存者・宮城喜久子)<sup>7</sup>

大城知善は、戦後、沖縄文教学校(米軍によって設立された速成の教員養成機関)の教員となり、生き残った学徒に再会し、その無事を喜んだ。

「戦後、文教学校で、大城知善先生が『仲宗真(旧姓)、元気でよかったね』と声をかけてくれました。『糸数で家に帰したときに、もう帰って来なくていいと言いたかったけど言えなかった』とおっしゃっておられました。戦時中南風原の陸軍病院から自宅に近い糸数分室に配置換えになった時、先生の許可を得て一度家に帰してもらったことがあったのです。先生の言葉にあまりに感動して、ありがとうございますも言えずに、ただただ涙が流れるだけでした。

先生方は、生徒を一人でも多く親元に帰したいという気持ちだったんじゃないかと思います。(ひめゆり学徒隊生存者・謝花澄枝)<sup>8</sup>

岸本幸安は、沖縄戦中、砲爆撃の中、亡くなった学徒の遺骨を大切に持ち歩き、戦後同郷の学徒に託した。

「文教学校の開校式2日前の1月8日、次々集まって来る学友と手を取り、無事を喜び合いました。一方、守下ルリさんから第三外科壕へのガス弾(黄燐弾)襲撃の様子を聞き、胸が張り裂けそうでした。翌日、岸本幸安先生が『君から預かった嵩原芳の遺髪と遺骨だよ』と、茶の角封筒を渡されました。遺骨は芳さんの傷の中の骨片を取り包んだものでした。あの日から8か月、大切に守って来られた先生に心から感謝申し上げます。3月の末、親元に届けることができました。(ひめゆり学徒隊生存者・前野喜代)<sup>9</sup>

仲宗根政善は、戦争で多くの教え子の命を失わせたしまった罪の意識から、戦後教師をやめようとする。しかし、食べ物を求めてゴミ捨て場をあさる子どもたちを見て、教育者として生きていく決意をするのである。

「あの時、もう教壇に再び立つまいと思った。(中略) 小高い丘の上に、米軍の大きな塵捨て場があり、黒煙白煙が渦巻き、塵を満載した米軍のトラックが、行き来していた。(中略) よれよれの服をまといぼろぼろの袋をさげた無数の小さい乞食の群れがたかり、血眼になって、塵の中をあさっていた。(中略) 皆、われわれの教えていた国民学校の学童たちであった。

戦争の悲惨と教育の荒廃を、これほど見せつけられたことはなかった。(中略)

私は、やはり教育にかえり、教科書の編修に専念しなければならぬと、思い直した。」(元女師・一高女教師・仲宗根政善)<sup>10</sup>

西平英夫は戦後、大学生の娘に、正しい判断力を養うためにはいろいろな角度から物事を見るようにと助言している。戦前強烈な軍国主義教師だった自分自身と向き合うことによって痛感した思いだったのだろうか。

「私が本代を値上げしてほしいと言うと父は、おまえの最近の読書傾向は小説にかたより過ぎだ、もっと広く読め、父の本でもそろそろ読めるのがあるはずだ、と言った。私が、お父さんの本棚は、最近歴史の本がふえ、以前とはずいぶん違うね、と言え、正しい判断力を養うためにはいろいろな角度から物を見ることだ、勉強したくても出来ずに死んでいった人たちの分もしっかり勉強しろ、と五百円くれた。

その時私は、今度父が帰って来た時には、沖縄で父が感じたことを必ず聞いてみようと思った。」(西平英夫先生の娘・松永英美)<sup>11</sup>

生き残った教師たちがほとんど戦争体験を語る事が出来ない中で、仲宗根政善は戦後早い時期から自らの戦争体験を書き残し、教え子たちにも書くように勧め、ひめゆり学徒隊の戦争体験を後世に伝えることに尽力した。仲宗根は、戦争動員の歯車となった自らの痛恨も厳しく書き残している。

「(南風原の陸軍病院壕に置き去りにした一引用者注) 渡嘉敷からしてみれば、壕にほうり捨てて去った先生や学友よりは、救ってくれた米兵のほうがありがたかったにちがいない。(中略) あの場合はしかたがなかったと、いくらいいわけをしてみても、それはいいわけにはならない。自分を社会からひき離し、戦争からひき離して考えたときのいいわけで許されるべきことではない。日本国家全体が犯した罪が、具体的には自分を通じてあらわれたのである。」(元女師・一高女教師・仲宗根政善)<sup>12</sup>

「あの時は、どうにもならなかったと、どうして言えるであろうか。戦争への歯車にはめこまれ、ひきずられて、戦争へと生徒を引率した教師の責任である。不明にして、さめた眼ももたず、戦争へひきずられて行った罪である。その根は深くおそろしい。私は、今もその重い負い目を

負いつづけている。」<sup>13</sup>

ひめゆり学園(女師・一高女)の教師たちの多くは、教育に情熱を傾け生徒を慈しむ教師たちであった。しかし沖縄戦では、生徒たちを過酷な戦場へと動員する役割を果たすことになる。教師たちの中で、生徒たちの戦場動員に疑問を抱く者はほとんどいなかった。当時の軍国主義の潮流の中で、教師の思考も行動も社会や時代から自由ではいられなかったのである。教師たちの戦前・戦中・戦後体験には、今という時代を考える上でも、重要な手がかりが刻まれているのだと思う。(終)

(普天間朝佳)



戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」の展示より

- 1: ひめゆり平和祈念資料館資料委員会『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック(展示・証言)』2004
- 2: ひめゆり平和祈念資料館『戦後70年特別展 ひめゆり学徒隊の引率教師たち』2015
- 3: 『潮』第146号(1971年11月)
- 4: ひめゆり平和祈念資料館『戦後70年特別展 ひめゆり学徒隊の引率教師たち』2015
- 5: 仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川学芸出版1995
- 6: 西平英夫『ひめゆりの塔—学徒隊長の手記—』雄山閣出版1997
- 7: 宮城喜久子『ひめゆりの少女・十六歳の戦場』1995
- 8: ひめゆり平和祈念資料館『戦後70年特別展 ひめゆり学徒隊の引率教師たち』2015
- 9: 同上
- 10: 仲宗根政善『石に刻む』沖縄タイムス社 1985
- 11: 西平英夫『ひめゆりの塔—学徒隊長の手記—』雄山閣出版1997
- 12: 仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川学芸出版1995
- 13: 仲宗根政善『石に刻む』沖縄タイムス社 1985

## 仲宗根政善日記抄 (58)

〔1980年〕四月二十九日

天皇誕生日。毎日降りつづいている雨は、まだあがらない。曇り天気である。大平首相が渡米するので、国民の間で、防衛論議がさかんになった。ソ連は、アフガニスタンを侵略している。北海道にいつ侵入するか保障の限りではない。戦争を防ぐには、力の均衡が必要である。米ソの軍事力の均衡を保つため日米安保は絶対に必要であると、自民党は強調する。それこそ日本を戦争へとまきこむおそれがあると野党は反駁する。テレビの画面を見ていると、戦争への恐怖をかりたてて、防備を強化しようという論がたかまりつつあることを感じる。テレビ討論で自民党は、国を守ることは一体、何をまもるかという質問に対して極めてあいまいな答えである。沖縄戦を体験した者には、極めて明確に答えられる。それは、国民の生命を守ることである。沖縄戦で、国を守るためだといながら、一体、県民の生命を護られたのか、県民の生命を鴻毛のかるきにして、国を守るということで、県民十二万人が犠牲になったのである。戦争が、国民の生命を護ろうとはしていない。一体戦争とは何か。国民の生命を犠牲にして何を護ろうとしたのであろうか。生命の中にこそ無限の価値がひそんでいる。戦争によって護ろうとしているのは何か。国民の生命を護ることをぬきにして一体何かがあるのか。生命をなげすてて何を護ろうというのか。

国を守ろうということを強く主張する者は、自らの生命をいつもとっておいている。戦争を計画するすべての人間は、自らの生命はまず安全地帯においている。庶民の死によって国を護ろうというのである。最初に自らの生命をなげ出す、戦争計画者があるであらうか。

バクナー中將から降伏を勧告された牛島司令官は、摩文仁が丘頂上から刻々と傷兵の戦死して行くのを眺めながら、なお本土防衛のためと、これを黙殺している。この愚行こそが、戦争の正体をもっともむき出しにしている。国民の生命を軽きにして、一体、国の何を守ろうとしているのだらうか。

人質救出作戦と称して、それ以上の人間を殺す。これが人質作戦の本質である。人質となった人々の生命を重んずるといっては口実にすぎないとしか言えない。多くの人間を殺して、わずかの人間の生命を救う。人命が最上のものならば、あらゆる犠牲をはらって、人質を救出することにある。まことにおろかしい米軍の救出作戦である。どうして、もっと生命を重んじないのか。生命を重んじた行為とは決してとれない。愚行である。日本国民は、「何と馬鹿な」と感じている。大平首相は、心情的には理解出来ないでもない、アメリカのご機嫌をうかがっている。国民の気持をアメリカに率直に伝えてほしいものである。苦言を呈してくるのが、友好国としてとるべき態度であり、迎合することであってはならない。

つゆをあびて、仏桑華がまっかに咲いている。直也ちゃんが息をのみながら見とれた姿が目にかぶ。かつてこの地があのおいまわしい戦争にまきこまれたとは思えない。ここへ引越したとき、弾片がいくらかでも庭から出た。

雨あがりの空に、爆音が聞えて来ると、戦争を思い出す。三十五年にして、またあの悪夢を呼びさますことのみが多くなりつつある。戦争体験を決して風化させてはならない。生命が至上のものであるという認識はさらにさらに深められなければならない。

〔1980年〕五月一日

「沖縄の悲劇」をひめゆりの塔をめぐる人々の手記として、角川書店から出版することになった。今日、編集部の伊達百合さんから、中野好夫先生の推薦のことばと、広告文を送っていただいた。ひめゆりの塔は、本土ではもう忘れかけようとしている。あの悲劇を絶対に風化させてはいけなさと書いておられる。

「著者のことば」は、朝比奈さんがまとめてあり、苦心したあとがありありで、私の気持を簡潔にまとめてあったが、書きもしない文を著者のことばとするのは、気がひけたので、著者のことばよりとせよと注文をつけた。

米軍の目をぬすみながら、こっそりまとめ書いた記録であり、伏せられた部分が多かった。それでも二回も映画になって、世に知られるようになった。沖縄は日本全体の五三%の基地を占めて、今や沖縄の海兵隊は急速展開部隊となって、印度洋ペルシャ湾に進撃する態勢をとっている。

特殊侵攻作戦用のMC-130輸送機は、イラン人質作戦に、直接、嘉手納飛行場から出たとの疑いを持たれている。

梯梧の花咲く五月の空は青く澄みわたり野には白百合の花が咲きかおっている。澄みわたる白雲の浮びたり、など島人のなげき多きぞと、終戦直後、カバーヤーの立ち並ぶ村々を眺めながら歎いたのだが、高層建築物の立ち並んだ白い島の上の澄んだ空を仰いでいても、同じ歎息ばかりが出てくる。地上の繁栄は形ばかりで、人々の心の頹廃はおそろしい。犯罪はふえて、非行少年の数は人口率にして日本一である。戦前と著しくちがったことが、基地であってみれば、まさに基地は諸悪の根源である。沖縄が、孤島でつちかわれて来た相互信頼しあって来た人間関係は、いま滅茶々にされつつある。

人間関係の信をとりもどすことがなければならぬ。人と人との個人の間でも、国と国との間でも同じことである。

伊達百合さんへの返事の速達を出しながら、自分は どうして生きることが出来たのだろうかと考えた。それは一言にしていって、人間に対する信であったと思う。

六月二十三日、牛島司令官が自決した日、私も、喜屋武断崖に追いつめられていた。十二名の生徒をつれて、阿旦のかげで、死をみつめていた。私は生徒たちと少し離れて岩の上に登り東の方を眺めていた。昨日日米両軍が最後の死闘をつづけて硝煙が渦巻き、岩も燃えていた活火山の摩文仁が丘は、静かになっていた。米須の海岸には船艇が浮んでいた。青い服をつけていた米兵が、白い浜から船艇へと小舟に乗って渡って行く。われわれは、鬼畜米英をたたきこまれていた。しかし、

私には青鬼のイメージはなかった。やはり彼らも人間だと感じた。そう直感したのである。その瞬間、恐怖がきえていた。

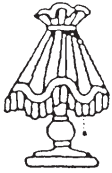
やがてわれわれは包囲されて、敵米が目前にあらわれた。十二名の生徒たちは、車座になりより会って、三発の手榴弾の栓を抜こうと身がまえた。福地キヨ子が、先生いいですかとさげふ。ぬくのではない！ぬくなど私が強くさげふと、福地はぬくのをやめた。私には、よもやこのいたいけな生徒たちを惨殺はすまいと直感した。先刻、はじめて米兵の姿を見たときの直感が私にはあった。生徒も私を信じすなおに手榴弾をほった。十三名の運命のきまる一瞬であったが、われわれは、死のふちから生き残ることが出来た。その生死の運命をわけた一瞬の行為のそこに人間への信が、電光のようによぎったのである。決して死んではいけないと決心していたわけでもなかった。疲労しきって、生死の境はもうろうとし、生と死の境はおぼろになっていたのである。それでも生死の境に、人と人との信頼が強きはたらいていた。もし自分の生と死とを分岐する力があつたとすれば、まさしくそれは信であつたと考えられる。はじめ米兵をみたとき、うわさの通りに青鬼と直感したとするならば、あるいは、生徒に手榴弾のせんをぬくことを許したかもしれなかった。自分の心中を深く洞察して行くと、やはり、人間への信があつたと思う。生徒たちもそうであつた。とくに私の命令にすなおについて来たことは仕合せであつた。生死のさかいに来たとき、人間の心の奥底にあるものが力をもたげてくるのではなからうか。普段は意識しない、底にひそむ力が出て来るように思える。

世界は個人と個人の間にも、国家と国家の間にも次第に信を失いつつある。人間社会の平和を維持して行くのは信ではなからうか。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。〔〕は編集で補った。

※旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。

※□は判読不能



# 本棚

仲程 昌徳

## 沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 第6巻 各論編6 沖縄戦』

本書は、「沖縄戦への道」「沖縄戦の経過と特徴」「沖縄戦(人びと)の体験」「沖縄戦の諸相」「沖縄戦の戦後処理と記憶・継承」の五部立てになっている。それぞれの表題からわかる通り、米軍の上陸から日本軍の組織的抵抗の終了までといった地上戦の推移だけでなく、その前後に起こったあるいは起こっている沖縄戦と関わりのある出来事にも目配りした、いわゆる「沖縄戦の総決算」を意図したものとなっている。

さきに、琉球政府は『沖縄県史第8巻 各論編7 沖縄戦通史』『沖縄県史第9巻 各論編8 沖縄戦記録1』『沖縄県史第10巻 各論編9 沖縄戦記録2』を刊行していて、「沖縄戦記」の画期をなした壮大な事業を行っていた。画期をなしたというのは、住民の体験談を網羅していくといった仕事にはかならないが、その「採録にあたっては、つぎのことに留意した」として「1 陣地構築協力(飛行場、陣地構築など)」「2 増産諸統制ならびに供出(野菜、芋、家畜など)」「3 疎開(九州、北部)」「4 防衛召集(戦闘、前線への弾薬、食糧運搬、負傷兵の後送、船舶特攻隊の後方任務など)」「5 一般県民の戦闘中の後方任務(前線への弾薬、食糧運び、負傷兵の看護、炊事など)」「6 壕生活(水、食、生理、出産、スパイ嫌疑、その他特異な生活)」「7 友軍将兵に壕を追い出されて(とくに親子連れなど)」「8 米軍の砲爆撃と死体の状況」「9 県民の生死観(人間性の喪失、動物的心情など)」「10 投降(投降心理の推移)」「11 収容所(負傷者、食糧問題、死体埋葬、軍民の分離、その他)」「12 村への復帰(食、衣、住、遺骨収集、農作物の異常繁殖、協同作業、復興など)」といった点を上げていた。「留意」したとされる12の項目に見られる通り、それらは、軍の動向や兵士たちの戦闘にではなく、戦場に放り出された沖縄の人びとに焦点をあてたものとなっていた。

本書は、旧県史の視点を受け継ぎ、さらに徹底して検討していっただけでなく、これまでにない広がりのあるものとなっていた。例えば「地域の沖縄戦」として、「奄美諸島の沖縄戦」といった、これまで「沖縄戦」のなかでとりたてて立項されることはなかったのではないと思われる項目、「住民の体験」として「障がい者」や「ハンセン病者」を立項してい

ること、「占領と住民」に取り上げられている「戦争孤児」、さらには「日米両軍の諸相」のなかの「日本軍慰安婦」「朝鮮人軍夫」などがそうである。それらは、これまでも取り上げられてこなかったわけではないが、十分ではなかった。そのことを踏まえた上で、まだ解明しなければならない点が多々あることを指摘していて、さらなる研究を要請するものとなっていた。また「PTSD(心的外傷後ストレス障害)」に関する論述などの登場は、沖縄戦に関する研究が、他にも残されていることを示していた。

沖縄戦研究の広がりや深化は、沖縄戦研究者の輩出および史・資料の発掘、収集による研究材料の充実といったことと関係していよう。研究者の輩出は、多くの事象の掘り起こしを可能にしたし、研究者の多くが、戦争体験者ではないといったことで、史・資料を基にして、多面にわたる冷静な判断を可能にしたということがある。とはいえ、戦時期の資料の多くは、砲弾で四散してしまっただけでなく、焼却されてしまい、真相は闇の中といった事象も少なくない。

例えば、軍需工場の「生産現場に動員された」「女子挺身隊」の送り出しなどについて「実態は不明である」と言われているし、看護要員として動員された女子青年団員の「その総数は不明である」と言われているように、まだまだ、掘り起こし、解明しなければならないものが残されているのである。

本書の大切な点は、沖縄戦を、あらためて沖縄の人びとの体験にてらして明らかにしていったところにあるが、あと一方で、不明な点、解明が待たれる点についての指摘が随所に見られるところにある。

新しい県史が、幅広い目配りと新しい知見をおしみなく提供したものになっているのは言をまたない。そのうえであえて二、三注文を出しておくとするれば、戦時期の沖縄芝居や沖縄民謡、詩歌作品等に関する項目、米兵たちに持ち去られた工芸品等の流出物等についての項目、外国引揚者・外地帰還軍属たちの動向に関する項目などが欲しかった。

# 声

## だれの目にもとまらずに亡くなってしまった少女たち

東京都 12歳 坂口くり果

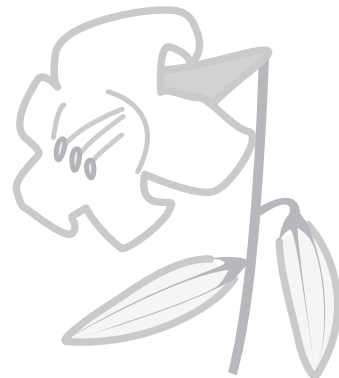
私は、今、平和について学習していて、いろいろなところに行き、いろいろなことを学んでいます。

この度は、ひめゆり平和祈念資料館で、ひめゆり学徒隊の方々の方々の歴史を知ることができ、沖縄戦のはげしさや、平和を願う思いが私の心の奥まで深く伝わってきました。

私は以前、『ひめゆりの少女たち』という本を読み、ひめゆりの存在を知りました。読むだけで頭がいたくなるようなはげしい歴史でした。そこで、生き残られた宮良ルリさんという方を知り、『私のひめゆり戦記』という宮良さんご自身が書かれた本も読みました。どちらとも、当時の様子がよく伝わって来ましたが、やはり現場を見るのはちがいました。この資料館に来る前、ひめゆりの病院壕、第20号壕も見に行きました。こんなに暗く、せまい中で、また、ものすごい人がそのときにいた中で、ずっと動きまわったのは、ほんとうにすごいと思い、また、しょうげきを受けました。

この資料館にてんじされていた、亡くなった方々の写真と文章の中には、顔写真もなく、どこでいつ亡くなられたのかも分からない人がいて、何もはられていなかったり、黒くなっていたりして、その部分を見ていて、だれの目にもとまらずに亡くなってしまったのだと思うと、涙が出てきてしまいました。また、この資料館で、私と1歳しか変わらない13歳の子がいたことも分かり、私に、こんなことができたのだろうかと思うと、ふるえが止まりませんでした。

当たり前なことだけれど、戦争は絶対にあってはならないものです。これからこんなことにならないよう、私のような子どもにもでもできることを見つけ、発信していきたいです。良い学習となりました。ありがとうございました。



# 資料館ガイド

## ◆多目的ホールご利用のご案内

当館ではひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約45分）、またはビデオ視聴（約30分）を事前予約制で承っております。ご予約時間は以下のとおりです。お電話にて空き状況を確認後、FAXかメールにて申込書をお送り下さい。

【講話・ビデオ】9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00

※ビデオ作品 ○証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」（25分／1994年）

○アニメ「ひめゆり」（30分／2012年）

※年末年始（12月30日、31日、1月1日～3日）・旧盆（旧暦7月13日～16日）は、講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6月21日～24日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

\*資料館へ入館していただく場合に限りさせていただきます。

\*ホールの収容人員は約200人（席）です。

\*多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。

\*予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルさせて頂くこともございます。

## ◆VTR室のご利用について

証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」とアニメ「ひめゆり」等の映像作品を視聴することができます。詳細はお問い合わせ下さい。

## ◆資料館ご利用案内

①入館受付 午前9時～午後5時（閉館は午後5時25分） ②休館日 年中無休

③入館料 大人¥310 高校生¥210 小・中学生¥110

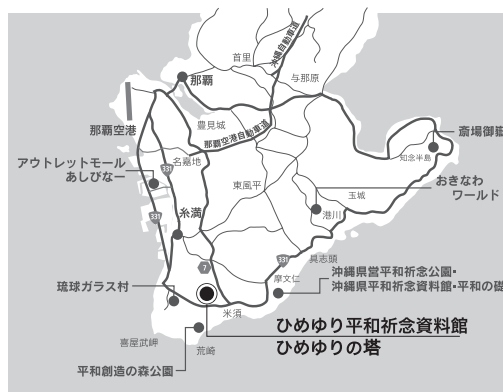
団体料金（20名以上一括）大人¥280 高校生¥190 小・中学生¥100

④交通

【バス】旭橋・那覇バスターミナルから〔89糸満線〕で約30分、糸満バスターミナルで〔82玉泉洞糸満線〕に乗り換え約15分、ひめゆりの塔前下車

【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約4分、赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で〔89糸満線〕に乗り換え約20分。糸満バスターミナルで〔82玉泉洞糸満線〕に乗り換え約15分、ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約30分



ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第62号

2018（平成30）年11月30日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館

〒901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎098-997-2100

URL: <http://www.himeyuri.or.jp/> Facebook <https://www.facebook.com/HIMEYURI.PEACE.MUSEUM/>

